

調査記

カナダ調査旅行

宇井智恵子, 玉井 暁子, 山下 千佳, 米田 泰子, 吉田 愉紀, 坂田由紀子

A book of travel to Canada for research

Chieko Ui, Akiko Tamai, Chika Yamashita, Yasuko Yoneda,
Yuki Yoshida, Yukiko Sakata

第1日(1992年9月11日)

私達衛生学科目のゼミ生5人は、指導教官の坂田先生と共に、卒業論文のテーマであるカナダの日系人を対象とした食生活の調査を行うため、この日、17:00発のカナディアン航空で、名古屋空港からカナダのバンクーバーへと出発した。

ローカルな空港という印象を持っていた名古屋空港は、混雑していて大変活気があり、予想外であったが、こじんまりとしているため、大変わかりやすく、順調に搭乗手続を済ませ、機上の人となった。

時期は既に初秋であり、カナダへはシーズンオフであったが、機内は満席に近く、折角シーズンをはずしたのにと先生は嘆くことしきりであった。

この旅行は食生活に関して調査をしている坂田先生が、外国にいる日系人の食生活を究明することが、逆に現在の日本人の食事について考える起点になるのではないかと考え、世界中に張り巡らされている西本願寺のネットワークを利用させてもらい、実現したのだった。

旅行といっても調査旅行であり、1年前から先生が現地に赴いて調査のネットワークを作られていたため、スケジュールどおりに行動しなければならず、いわゆる物見遊山ではないと先生から言われていた

が、カナダへ行ったことのある人はなく、旅行独自の期待感と緊張感で落ち着かなかった。

この出発の前までに、調査に協力して下さる方々や、調査のネットワークを作るのに援助して下さった方々へのお土産(カナダの日系人に最も喜ばれる上等の緑茶)の購入、日程の打ち合わせ、宿、飛行機、オプションツアーの予約等、連日のようにファックスや電話のやり取りがあり、これでやっと本当に調査が始まるという思いがした。

機内は快適で、とろとろ眠ったような気がしたが、バンクーバーには以外に早く8時間で到着した。

カナダには10の州と2つの準州があり、歴史的背景からフランス系カナダ人の集中するケベック州、ニューブランズウィック州と、かつての宗主国であるイギリスが残っているその他の州に分かれ、言語も仏、英語の両方が公用語とされ、English 66.8%、French 15.8%、バイリンガル16.2%、その他1.2%となっている¹⁾。

また、アメリカが、さまざまな人種、民族、文化が混ざる中のように解け合おうとしている人種のメルティングポットと言われるのに対して、カナダは、切り張り細工のようであるというところから、カナディアンモザイクともいわれる。

人口の出身国構成では、イギリス系44.6%、フランス系28.7%、ドイツ系6.1%、イタリア系3.4%であり、日系は46,559人、0.3%となっている^{2,3)}。

バンクーバーはカナダの西海岸にあり、日系人が集中している西海岸の中で、特にバンクーバーは西本願寺のメンバーの数が多く、今度の調査もバンクーバーが中心になるということであった。

*京都女子大学家政学部食物栄養学科衛生学第二研究室

京都市東山区今熊野北日吉町35

Department of Food and Nutrition, Kyoto Women's University

バンクーバーは大きな空港であった。

到着すると思いがけなくスチーブストン教会の桐林先生が迎えに来て下さっていた。桐林先生は、昨年坂田先生が訪れて調査を依頼したスチーブストン教会の開教師である。

荷物が多いため、リムジンでとりあえず宿舎のバンクーバーのダウンタウンの中心にあるYWCAに行くことになったが、そこはモダンなビルの林立する中で一際目立つ古いビルであった。

荷物を下ろすと、調査のため集まって下さっているシニア（60歳以上のメンバー）の人達に会うためにバンクーバー教会へ行くことになった。

そこで待っていて下さった八木さんにお目にかかったが、八木さんはバンクーバー教会のメンバーで、カナダ実業経済専門家協会会員として経営コンサルタントをされており、一等船舶通信士で、カナダに関する本も出版されているという大変マルチな能力の方で、今回の調査についても切符の手配から宿舎の予約、さらに調査の依頼まで実に細かくアレンジしていただいた。バンクーバーの仏教会でもその行動力と誠実さで多くの人から信頼を受けており、この方なくしてはこの調査は実現しなかったという。

この日は、ゲートボール愛好会のシニアの女性12名のアンケート調査をすることが出来た。

二世の人の中には英語しかわからない人もあると聞いていたので、英語の質問紙も用意したが、調査の間も自分の家族の話や収容所の話等がどんどんはずんでしまい、一人のデータを取るのに30分かかり、先が思いやられた。

ここで日系カナダ人について少し説明をしなければならぬと思う。

日系カナダ人（日本からカナダに来た人々とその子孫）は、その渡航時期から大きく三つに分けることが出来る⁴⁾。

1. 自由渡航時代（1877-1907年）（選挙権を持たず、合法的に差別を受けていた時代）

この時代は、出稼ぎとして単身で渡加し、漁業、農業、製材業、鉄道、鉱業、商業の肉体労働に従事し、BC（British Columbia）州の発展に寄与することが少なく、カナダ人から見れば奇妙な習慣を持ち、貧民地区に居住し、白人社会に混じることのなかった世代といわれる。

2. 制限渡航時代（1908-1940年）日本からの移民を年間400名（1908年）からさらに150名（1928年）に制限された時代。

簡単に入国出来なくなり、一時的移住は永住へと

変化する。有名な写真花嫁が登場する。

日系人が定住し、日系人社会が社会的統率力を持った民族社会になる。しかし、連邦政府は、公然と日本人排斥を行い、経済活動をするのに必要な許可証の発行を“選挙権保持者”に限り、日系、東洋系の人々は政治的のみならず、職業等の経済活動からも排斥を受けることになる。さらに同一職種でも東洋系は賃金そのものも合法的に切り下げられた。

教育の面でも東洋系は公立学校から排斥され、教員には日系人は決して採用されず、現在のロスアンジェルスと同様に、リトルトウキョウ（日系人街）の白人による襲撃も行われたという。1920～1930年は二世の成長期であり、日系人がカナダの社会に次第に適応し、評価を得ることになったといわれる。それは、両親が過酷な生活のために働かざるを得なかった状況にもかかわらず、放課後開かれていた日本語学校が広範な意味で子供の生活を補ったこと、日系人社会の社会的規範が確立していたこと、日系人排斥のため日系人社会でしか生きていけなかったことが日系二世の不良化を防ぎ、次第に日系人の評価を高めたという。

3. 戦時体制時代（1941～1949年）

日本とカナダの国交が断絶し、カナダ政府は日系人を「敵国人」として規定し、日系人は連邦政府の監視下に置かれた。

更に米国で有名な Evocation（防衛地域からの立ち退き）で、カナダのほとんどの日系人が内陸収容所に押し込められた。

この立ち退きは、財産、経済活動等の全ての喪失を意味したが、更にカナダ政府は住、食のうち食の保障をせず、アメリカ政府が財産の保護、住、食の保障をしたのに比べて大きな差がみられた。

このような日系人の状況の中にあっても、カナダと交戦状態であったドイツ系、イタリア系の人々には何の措置も採られなかったという。この収容所における日系人社会では、同県人集団が崩壊し、“標準化された日系人文化”が生まれることになり、日系人が一つの集団に融和して拡大したという。

日本の敗戦と共に、カナダ人による日本人排斥に対する市民活動が行われ、1949年4月に日系人の移動が認められ、市民権、投票権が再発効された。

4. 近年の日系カナダ人（1959年以降）

この時期では一世は、40才台後半になっており、二世の時代に入って来ている。

1951年には平等賃金時代、平等雇用法、1954年には住居被差別法が成立し、1970年には、英仏系以外

の人口が総人口の26%を超え、職業、教育面に排斥、差別はなくなった。又、日系三世を中心とする第二次大戦下の日系人に対する‘リドレス運動’によって、1988年リドレス（カナダ政府による40数年前の日系人迫害に対する正式の謝罪と保障）が認められ、基本金として約21,000（カナダドル）が支払われることになる⁴⁾。

これらの歴史的背景を踏まえて日系カナダ人を分類すると、

- 一世 日本文化の外に出ることは殆どない。年齢的には70才以上。
- 二世 日本文化と白人文化の間にありながら、他の日本人と親交を維持している。年齢的には60才以上で引退期にあり、日本文化に傾斜している。戦前、戦後の共通の体験を持っている。二世同士の交婚率は5.6%である。
- 三世 白人とのみ交際する人が多く、白人との交婚率は75%位で、特に人種交婚率が高い。
- 新移民 戦後の移住のなかで、カナダ市民の日本からの帰国、“呼び寄せ”（カナダ居住者が、子、配偶者を呼び寄せること）以外で1965年以降、移住審査を受けて移住した人。新移民は高学歴で、特殊技術を持ち、宗教に関心が薄く、個人主義の傾向が強く、日系社会とは別に直接カナダ社会に融和しようとしている人達⁴⁾。

翌日はバンクーバー教会婦人会設立40周年記念行事の式典、パーティーのため、調査中にも広い厨房では、その準備が行われており、慌ただしい雰囲気であった。先生からは、邪魔にならないようにするだけでなく、自分達で出来ることを探して手伝うようにと厳しく言われていた。

厨房は、200人位の料理が出来る大きさで、どんな行事でもメンバーの人達によって準備されると言うことであった。特に、大きな鮭の解体などは、元漁師のシニアの男性が受け持つことになっており、この日も3、4人の男性が、黙々と作業をされているのが印象的であった。

この日、昼のメニューは次のとおりである。

- サーモンのあらだき
- 大根の煮物
- 冷奴
- 胡瓜と大根の漬物
- デザート（饅頭一漉餡入）——表面に焼コテで字がついており、学校の祝典などによく出される紅白のふかし饅頭。とても手作りとは思えな

かった。

準備が終わると、到着した日でもあり、結構疲れてしまった。帰り道は、のんびりと中華街や、日本人街を見ながら宿に帰り1日が終わった。

第2日（9月12日）

本日はバンクーバー教会の祝典のため、9時まで教会へ行く事になっていたが、定刻に起きられず、5人とも先生に叩き起こされることになり、結局30分ほど遅れてしまった。

教会へ着くと八木さんが待っておられ、今から急遽教会の傍にある日本人学校へ調査に行くように言われた。子供を送ってくる父兄に調査の依頼はあるが、父兄はすぐ帰ってしまうので急ぐようにとのことであった。

日本人学校の父兄は20代～30代で、中国系や白人系の人と結婚している人、新移民の人など実に様々であった。ここのホールでは野菜の即売などもされており、コミュニティーとしても機能しているように思われた。

ここで約40人ほどの調査を終え、直ちに教会へ戻り、昼食後式典とパーティーの準備のお手伝いをした。パーティーのメニューを次に示すと、

- お寿司 巻き寿司、稲荷寿司、握り寿司（鮭、鮪、いか）
- 酢の物 胡瓜、じゃこ、春雨
- 魚、チキンのデープフライ
- 鮭の照焼
- お煮しめ こんにゃく、里いも、蓮根、人参、鶏肉、ごぼう
- カナッペ 胡瓜、ハム、ゆで卵、アスパラガス、チーズ
- おにぎり ふりかけ、赤飯
- デザート ぶどう、苺、パイ、ケーキ、ワインジェリー

式典の前に、24名の調査が出来たが、テーブルの飾り付け、料理の運搬等全員で手伝いすべてが終了したのは、夜の10時も回っており、YMCAに帰った時は、さすがに疲れてしまった。しかし、私達が手伝ったことは好評で、しかも京都女子大学の名は、殆どの方が知っておられた。しかし、来て早々からの強行軍で、これからまだ100人以上のデータを集めなければならないと思うと、いささか疲れを覚えてしまった。

第3日目（9月13日）

この日は昨日に続いて、教会で彼岸会の法要があり、私達が紹介され、米田さんが代表してお焼香を行った。この日の司会は才本夫人で、ご主人は日系人で会社のオーナーであり、夫人も B.C. 大学出身の才媛で、バンクーバーでは名流婦人である。

この日は大分慣れてきたせいか、法要の邪魔にならぬよう手際よく調査が出来た。

夕方は八木さん心づくしの中華料理店への招待である。その店は、見かけは何ということはないが、中は優に100人以上は入れるような大きくてきれいなレストランで、愛想の良い中国人のウェイターに迎えられた。さすがにシーフードは豊かで、料理される伊勢海老、ミル貝、牡蠣など生きたまま見せてもらい、皆大喜びであった。お料理はおいしく、先生がはらはらするほど遠慮なく頂いてしまった。

第4日目（9月14日）

本日は、バンクーバーから45分ほど離れた桐林先生のスチーブストン教会に行く予定である。

スチーブストン教会は、日本人のカナダ移民が初めて住みついた所で、1887年に工藤儀兵衛という人がカナダに渡航し、フレーザー河にひしめくように上ってくる鮭を見て同郷の和歌山県三尾村（現在アメリカ村といわれる。）の血縁者を呼び寄せ、次第に日本人のコミュニティーが出来上がったという¹⁾。

そのコミュニティーの中心として仏教会が設立されたといわれている。

仏教会は、単なる信仰の対象としてのみならず、排斥を受けていた日本人にとっては、就職、結婚などの生活面に関してもコミュニティーとしての重要な機能を果たしており、精神的な支えとして当時の人々にとってはなくてはならない存在であったという。

現在では、日本だけでなくカナダでも既成の宗教が何れも抱えている若い人の宗教（教会）離れが進み、メンバーの高齢化が問題になっている。

私達は、タクシーに分乗して出かけたが、スチーブストン教会は広々とした芝生の中にドイツ人の設計によるといって、とてもモダンな建物であった。

婦人会メンバーの人達は、朝早くから私達のために昼ご飯はもとより、デザートまで作って下さっていたという。

私達は、早速アンケートを始めたが、次々と時間

を見計らってきて下さるのでとても助かったが、この陰には、京女大出身の桐林先生の奥様の細かい心遣いがあり、今更に同窓生の有難味を感じた。

この日、ご馳走になったメニューは

- チャーメン（セロリ、もやし、人参、玉葱、豚肉をいため、中華麺にとろみのついたソースが混ぜられており、ソフト焼そば風）。元は中華料理であったが、今はお祝い、パーティーには必ず出るカナダの日本料理
- おにぎり
- お煮しめ
- フルーツポンチ であった

第5日（9月15日）

今日は調査のスケジュールがなく、オフだったので、バンクーバーのダウンタウンの中心にある図書館に、カナダの栄養に関するデータを集めるために出かけた。

図書館は広く、日中にも関わらずかなり混んでいたが、非常に親切な係の方がおられて助けていただいた。

其の後は、やっと待ちに待った自由行動で、みんな思い思いに街に出かけた。

第6, 7, 8, 9日（9月16～19日）

カナダでのオプションのカナディアンロッキーの旅である。

雄大なロッキー山脈、氷河独特の深いエメラルドグリーン湖など、圧倒されるような雄大な自然の中をバスで移動したが、なかでも凄かったのは、コロンビアアイスフィールドの雪上車による氷河見物であった。

氷河は毎年後退しており、いつれ消失するとも言われているが、山の谷合いに広がった広大な氷河まで、巨大なタイヤの雪上車がゆっくりと私達を運んでくれた。氷河の気温は零下10度ともいわれ、風も強く、震え上がるほどの寒さで、落ちたらまず助からないといわれる氷河独特のエメラルドグリーン湖の鋭い裂け目があちこちに顔をのぞかせ、滑らないように歩くのは大変スリリングであった。

ツアーの間は、ホテルも食事も豪華版で、ファーストフードのYWCAの毎日とけた違いで、帰るのが嫌になったほどであった。

第10日目（9月20日）

フレーザーバリー教会と、スチーブストン教会

に二手に分れて調査に出かけることになった。それは、フレーザーバリー教会の調査の日にたまたま、ステイブストン教会でフードフェスティバルが開催されることになっており、特にお願いして調査させていただくことになったからである。

フードフェスティバルは教会が資金を得るため、近隣の人を対象に、メンバーの婦人会の人々が料理を作って売ることになっており、ここで売られる日本料理が次第にカナダの人達に親しまれ、ファンを作るきっかけになったとも言われている。

この日即売されたメニューは次のとおりである。

- ・照焼チキン、チャーメンとライス
- ・シュリンプカレー
- ・スイートサワーミートボールとライス
- ・キャロットケーキ
- ・大福餅
- ・三笠饅頭
- ・ズッキーニ、バナナのパン
- ・各種クッキー

田舎であるため、近郷の人はこの行事を楽しみにしており、日系人ばかりでなくいろいろの人が家族連れで訪れて来、思いがけないほどの混雑ぶりであった。

一方フレーザーバリーは、バンクーバーから車で1時間近く離れた農村地帯であり、私達が到着した時には、既に早くから婦人会の人達が集まっておられ、私達のために手料理を作って頂いていたが、調査に集まって下さったのは婦人会が主であるにもかかわらず、意外にも半数は男性であった。これはお年寄りが多いため、ご主人が車を運転して来られており、調査にも協力して頂いたが、何を聞いても横の奥さんに聞かれるので、調査にならず、困ってしまった一幕もあった。

第11日目（9月21日）

今日は八木さんのお知り合いの合同教会（キリスト教）のメンバーの家で調査を行うことになった。ここでも、巻き寿司、手作りのこんにゃくを使ったお煮しめが作られていた。メンバーは14、5人の方が集まっておられ、カナダ最後のこの夜で調査目標人数の200名を無事達成する事が出来た。

思えばいろいろな人生に触れた二週間であった。

明治時代に日本人がカナダに入植した時は、カナダ社会から排斥を受けており、特に一世は同じ労働をしていても低賃金に抑えられ、夫婦がひたすら働かなければ食べられないような、奴隷に近い状態であったという。

バンクーバー教会に、葬儀の馬車と立派なフロックコートを着た人達の写真が飾られていたが、家畜小屋のような家に住んでいても、故郷へはフロックコートを着たこのような写真を送っていたという。

前述したように、最近になって収容されていた人々に約200万円見当のお金が政府から支払われたが、日本本土と同様に、いやそれ以上に海外の日本人も、あの大戦によって大変苦しい思いをしたのである。収容所では、許された範囲しか移動出来ず、不自由な中で食生活では、工夫して何でも自分たちで作る事が習慣になり、豆腐、こんにゃくを始めとした殆どの日本食品は自分達で作ったという。

しかし、現在では、日本からの輸入も多く、大抵のものは手に入るが、シニアの人達は今でも手作りをしているという。しかし、キャンプ生活によって、私達が期待していた郷土料理はいわば消失し、新しくカナダの行事食として、寿司、サンドウィッチ、チャーメン、饅頭、ケーキが必ず作られる。

私達の旅行は、単純に食事の調査を起点としていたが、食べることは人生と切っても切り離せない、いや人生そのものではないかということ再認識した思いであった。

現在は既に三世、四世の時代であり、人種交婚が多く、カナダ日系人についての研究者である新保満氏は、現在辛うじて存在する日系人民族社会は30年の間に消滅するであろうとしている³⁾。

しかし、三世以前の人々は、日本人より以上に、日本人としてのアイデンティティーを持ち続けることで生きて来られたのではなかったか。

手作りのこんにゃくなど食べたことがなかった私達は、このこんにゃくに秘められた日系人の歴史に言葉もなかったのである。

文 献

- 1) Authority of the Minister responsible for Statistics Canada: Canada year book, 120, (1986)
- 2) Authority of the Minister responsible for Statistics Canada: Canada year book, 92, (1992)
- 3) F. H. Leacy: Historical of Canada, 118 (1971)
- 4) 新保 満：日系カナダ人社会の変動，カナダ研究年報，1, 178-192 (1980)
- 5) 辻 信一：日系カナダ人，13-29 (1990)
- 6) 八木慶男：カナダ大陸横断 鉄道の旅，122-236, (1982)